

クズが送る可能性を追求するVRMMO

海月の一れん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは人間の可能性を追求するVRMMOのお話。自分だけの異能と呼ばれる特殊な力を与えられ、それ以外の大体を？奪されたといっても過言ではないゲームシステム。グラフィックはリアル過ぎて、再現しなくていいところまで再現している。まるで一つの異世界だ。肌を撫でる熱気や鼻孔をくすぐる悪臭。現実と同じように感じる痛みが、このゲームはプレイヤーにまったく媚びないことを伝えてくる。自分たちで対応していかなくてはいけない…。

「これはゲームだから」

敵が強い、異能を使い過ぎたら死ぬ、環境で死ぬ。そんなゲームで免罪符のように使われ始めたこの言葉が、人々の民度をどんどん低下させていく。そんな中、クズで自我が強すぎる男がいた。金を借りてばかりで、弱いクセに敵に一番に突っ込んでいく。かと思えば1+1から1-1を見出すようなイカレた思考を持っているヤツだった。変な魅力がある。まるで誘蛾灯だ。

これはそんなクズとクズに引き寄せられたヤツ等が織りなすVRMMO。

「なあ、金貸してくれよ」

※このお話はし〇て(略)とギ〇ギスオンラインというweb小説から着想を得ました。これが気に入った人は是非読んでくださいあ。

## 目次

金が欲しかったら多少の闇には目を瞑らなくてはならない	1
それは酒飲みに必要なとされた異能	6
before 粉状の俺、after 宇宙人に魔改造された俺	12

金が欲しかったら多少の闇には目を瞑らなくてはならない

case 1 山道

ザツザツザツと、山道を歩いていく。これはゲームだが、ゲームとは思えないほどリアルであり、肌を撫でるジメツとした風や足に溜まっていく疲れ等再現しなくていいところまで再現している神ゲーだ。しっかりと荷物を背負いこんでからまた一歩踏み出す。足裏の泥のネチャツとした感じが、先程まで雨が降っていたことを示唆していた。空を見上げれば曇天で、山の天気は変わりやすいとは言うが、これじゃあ目的地に着くころには一雨くると考えると憂鬱になってくる。何で俺がこんなことしなくちゃいけないんだと、そこの小石を蹴ってみるが、どうにもならないので、先に転がっていく小石をポーッと眺めながら、どうして俺がこんなことをしているのか振り返ってみることにした。

case 1-2 過去

「金が欲しい」

待ち合わせの噴水広場で合流した廃人のゴミに開口一番放った言葉がそれだった。

「金エ？んだよ、前のレイドで稼いでたんじゃねえのかよ」

そう言いながら全身甲冑のヘルメット部分を外し、小脇に抱えながらドカッと腰掛ける。俺もその横に腰掛けると話を続けた。

「全部スツた。次は勝てると思ったんだがダメだ。あの台、ぜってー細工がされてる」

「その言い分何度目だよ。おまえの次のセリフは「反省&慰め会を開くための金を貸してくれ」という」

「反省&慰め会を開くための金を貸してくれ…はッ！」

「これも計算の内か！ジ○ジョーーーーー！」

「当たり前だぜッ！このジ○ジヨはなにからなにまで計算づくだぜーッ！」

ふう…とお互いなんも言わずに一呼吸入れる、唐突に始まったジ○ジヨごっこをひとしきり楽しんだ後、改めて金を貸すよう要求した。「金貸してくれよオ…マジで反省してっから」

「それも何度目だよ。てか借りるならお前の周りにいる奴等に借りればいいだろ。博士とか、自爆屋とか」

「博士エ？博士は無理だろ」

博士は学者タイプのプレイヤーでネチネチといってくるタイプのヒューマンだ。貸した金は必ず忘れないし、その貸しを別の何かで支払わせたり、あるいは莫大な利子付けて返すよう要求してくる。俺はよく博士に金を借りては、検証や考察、雑用を手伝わされているので、親しい奴らから「助手」と呼ばれている。俺はネチネチとした言い回しをする博士は苦手だが、クール系で切れ長目のデキる女上司といった風貌をしているので、仕方なく、本当に仕方なく手伝ってやっている。それに物理干渉系の異能持ちだしな。

「なんでだよ、博士と仲いいだろ？」

「仲いいっつーか、体よく使われてるだけだろ。最近だと三つ目の精神干渉系のヤツ相手に異能对抗して来いって言われたんだぜ」

俺は精神干渉系の異能を持っている。こいつのメリツトは人間相手によく効くということ。デメリツトは人間以外にはクソの役にも立たないということ。まあいろいろと工夫したら人間以外にも使えるレベルになるんだが、工夫なしで対抗できる他の異能と比べるとそこまで…って言うのが俺の評価だ。

んで、三つ目って言うのが俺と同じ精神干渉系の力を持った敵。三つの目が浮遊しているバケモンで能力は、見た相手に「神経麻痺」「感覚鋭敏化」「脱力」の状態異常を付与してくる。対抗手段は三つ。見られる前に視界を塞ぐこと、鏡や反射するものをもつこと、精神干渉系を能力持ちで状態異常を上書きすること。この三個目の対抗手段で倒せという命令だ。こいつは状態異常を付与してくるだけで、肉体は貧弱なので、レベル上げをサボってる俺でも倒せる。

「あー…アイツかよ、そりやだりいわ。絶対プレイヤーを不快にさせるってことだけを意識しているよな」

「それな、本当にだるかった。まあ倒せたけどさあ…。ああ話戻すぜ、また難題要求されるかもしれないねえから博士はパス。自爆屋は論外だろ。借りた金と命のトレードじゃねえか」

「まあ自爆屋はな。アイツ、お前の異能のおかげで続けられてるところあるし。ってかお前にはアイツ等頼ればいいじゃん。精神干渉系の開祖様よオ」

「やめろやめろやめろ！アイツ等積極的に洗脳したり俺を異能の実験体にしてこようとしてくんのに、頼れつかよ。この前なんか、『洗脳してパパになつてもらおう派』と『体を分割してカートリッジみたいに加工して自身と一体化派』で戦争してたんだからな。おぞましますぎんだろ」

うええ…考えると気持ち悪くなってきた。なんで俺がアイツ等のパパにならなくちやいけねえんだ。ってかなんでパパなんだよ、認知して♡ じゃねえよ。怖えわ。知らないうちに大量に子ども面したヤツ等が甘えてくるのはトラウマもんなんだよ。一体化派のやつも気持ちわりいヤツ等ばっかだしよお…。うごご…と考えがドブに沈んでいく俺を尻目に、ゴミ廃人は何か考え込んだ後、ボソツと一つの言葉を放った。

「なあ…稼げる依頼があるつつたら…やるか？」

天啓だった。神がこの依頼をやれと言った気がした。あくまで気がしたただけだが、それでもその言葉を聞いた瞬間麻雀並に俺に電流が走ったことは確かだった。

「やる。いややらせてくださいお願いします」

俺は懇願した。このドブに沈んだ思考を一時でも忘れられるならなんでもやるつもりだった。金をさっさと手に入れて、酒とツマミでこのクソを流し込みたかった。だから俺はろくに内容を聞かなくなった。目的と依頼の場所を聞いた俺は韋駄天の如く駆け出した。

人はそれを阿呆、もしくは無鉄砲という。

過去を振り返り、改めて自業自得であることを認識した俺はその認識からいったん目をそらし足を止めた。目的地だ。山の中腹あたりで、周りは切り開かれて、小さなキャンプ場くらいの広さがあった。目的地に着いた頃には雨がポツポツと降り始め、土は湿っていた。俺は背負っていたブーツをそばに置き、持ってきていた携帯型シャベルを取り出すと、ザツザツと足元を掘っていく。雷が落ち始めた。さつさとやって帰らなければ……。俺はやましいことがないハズなのに、焦りの感情が芽生えてきた。誰かに見られたらマズイ……。それだけは確かだった。こんな山中で穴掘ってるヤツなんか犯人以外の何者でもない。ゴロゴロと後ろで鳴る雷をBGMにせっせと掘っていく。いい感じの深さまで掘れたら、俺はそばに置いたブーツを拾う。大きさは両手で抱えるくらいのにデケエ壺で、中にぎっしり詰まっているのか抱えるだけで一苦労だ。雨で濡れて滑るので、一旦穴のそばに置いて、ついでに蓋を開けて中身を確認する。

「コロ……シテ……。コロシテ……。コロシ……」

人間が折りたたまれギチギチに詰まっていた。そいつは黒髪で軽く光る眼を持ち、この壺に入るくらいだ。身長が低い。身体が薄っぺらくなっている。ロリ体型の女だった。赤と黒の服を着て、左目に眼帯をしている。俺はこいつを知っていた。

「自爆屋……」

俺はそつと蓋を閉じ、なにも見なかったことにして、壺を穴に落とした。ザツザツとそばの土を上からかけていき、完全に平らになるように上から踏み固めていく。ふう…と俺は一息をつき、広場の手前に偽装用の看板を設置していく。

『コノ先、落石アリ。立入禁止』

仕事は終わった。俺は体の土を払い、濡れた服が体に張り付く不快感から報酬をもらったらひとつ風呂入ってからメシを食いに行こうと決めた。そうして特になにもなかった広場から出ていこうとする俺の後ろで特大の雷が落ちた。

まるで：事件の始まりを指し示しているようだったが、俺は気にせず、帰路につく。

たとえば、俺が受けた依頼が死体？の遺棄だったとしても、これはゲームの中の出来事であって犯罪にはならない。『ゲームだから』それが人の倫理観や道徳をゴミ以下のものにたらしめているんだろうと俺はこのゲームの真理を知った。

全身を濡らす雨が酷く不快だった。

case1End

このあと気持ちよく風呂入って、合流したゴミ廃人から報酬をもらい、朝まで飲み明かした。



## それは酒飲みに必要なとされた異能

case 2-1 居酒屋

それは昼の出来事であった。いつもの店でゴミ廃人と酒を飲んでいるとき、俺はふと気になったことがあったので酒の肴に聞いてみた。

「なあ…結局、アレ…自爆屋遺棄事件はなんだったんだよ」

ひとまず頼んだビールをジョッキでガツとイツキした。うめえ…酒は命の水とよく言ったもんだぜ。いい気分になりつつ俺は問うた。死体遺棄はこのゲームじゃあよくあることだった。このゲームはHPが0になつてもいくつかの条件を満たさない限り、死体が残り続けるしなんなら若干息をしているときもある。HP0＝死亡ではないのだ。HPつっのほまあバリアみたいなもんで、それがなくなると生身の人間と大して変わらなくなるから大体“死”なんだが。だから邪魔な死体、瀕死体を処理するための火葬場はあるし、やましいことをしたヤツは埋めるのが当たり前なので、差たる疑問を抱かなかつたのだ。だが埋められたヤツが問題だ。アイツ…自爆屋を埋めるということは自爆会のヤツ等を敵に回すということであり、レイドでの主火力である彼らを敵に回すという愚を犯すヤツはそうそういない。総スカンを食らうし、ログイン即自爆の粘着自爆を実行されるからだ。このゲームは死ぬと経験値を失うので、特定の異能でも持たない限り死に続けることは損でしかない。

「ああ…アイツ？なんでも…廃人パーティーで狩りしてた時、レア泥のアイテムを自爆で消し飛ばしたとか言って、懐に入れてたんだ。それが肉体向上系の異能からしたら垂涎的だったらしくてな？まあそのレア泥がドロップしたらこっちに融通するって契約で、それをブツチしたから報復として埋められたって話。これに関しては自爆屋の個人的問題らしいから、自爆会のヤツ等も自業自得で納得してたよ」

同じくジョッキを空にしたゴミ廃人がカランと氷を鳴らして事の

顛末を話してくれた。

「おつおう…」

俺はドン引きした。自爆しか取り柄がない自爆屋が廃人の狩りに混ざっていることや、そこで交わした契約をブッチしたというのも驚きだが、ブッチした相手が肉体向上系のヤツ等というゴリラの群れだったのが原因だった。アイツ等は単純なフィジカルでこのゲームを生き残っている猛者共で、腕が丸太くらいあるヤツとか、強靱すぎる足腰で八回空中ジャンプが出来るヤツもいる。エピソードの一つとして、物理が一切効かないトロールを謎の閃光魔法・飛び膝蹴りや赤色発光パンチで倒すというイカレたことをするのだ。『人間の可能性を信じた』そう。おかしいだろ。前者は一万歩譲って魔法の括りだから効いたことにするけど、後者はなんだよ。気合で拳が赤色発光するの：？このゲームは可能性を追求するのがテーマだがそれにしただって、人間の可能性異次元すぎないか？

「個人的に欲しかったんだって。尋問したら吐いたよ。そんで誰かにプレゼントするんだとき」

プレゼント：？プレゼントだった？アイツにプレゼントするような奴いたか？尋問はこのゲームじゃコミュニケーションの一環なのでスルーしといて、俺は見た目○○すばのめ○みんであるアイツを思い浮かべた。アイツは生粋の自爆スキーで、隙を見せたら自爆をするので、いつだって目を離しちゃいけない手にかかる子供と時間が表示されない時限爆弾を組み合わせたようなヤツだ。前述の爆破会のリントと合わせて、歩く起爆剤と呼ばれている。そんなアイツがプレゼントを贈るような相手を想像できなかったのだ。アイツは大半のやつに嫌われている。自爆でドロップアイテムを消失させ、自爆で味方もろとも爆発し、街の大通りで、なんとなくで自爆して周辺に被害をもたらす。好きなヤツの方が少ない。その少ない好きなヤツが、寄り集まって異能を洗練させていったことで、自爆会という会を発足し、やっとなある程度の地位を得られたのだ。

「んでもよー、俺はちよつと安心したぜ。遺棄で済んで」

俺はお代わりのビールを頼みながら言った。本心からの言葉だっ

た。なにせ、このゲームで自爆屋が自爆屋でいられたのは、俺が面倒見たのと俺の異能によるものだからだ。俺もアイツもベータ版やっけて、そんな時に知り合った。アイツがリアルのなんかで面倒な悩みを抱えてる時に、俺が多少なりとも相談に乗って諭したのだ。あと俺の異能は汎用性が高すぎて、正式版で初期異能として設定されたので、正式版でも自爆屋を続けられた。このゲームは自身が持つ異能をプレイヤー全員が使えるようになる『解放』や、特定個人のみが使えるようになる『継承』というシステムが存在する。ベータ版で『解放』された異能の一部は正式版で初期異能として実装されるという話があり、俺の異能がその一つに選ばれたという寸法だ。

自爆屋は俺の可愛い弟子だ。アイツが困っていることがあればできる限り助けてやりたいと思っている。それがアイツを自爆屋にしてみました責任感からなのか、弟子可愛さなのか俺はもうわからなくなっているが、このゲームを続ける限り、アイツの味方でありたいと思っっているのだ。ただ、ここでは倫理観や道徳がドンドン下がっていくので、生き埋めくらいでは困っている判定にならなくなってしまうのが前回の事件だ。俺は穢れてしまった…？

「お前ホント、自爆屋に甘いよな。てか他のヤツ等にも甘い。特に精神干渉系のヤツ等とか」

「はあっ…？アイツ等に？俺が？冗談だろ」

俺は心底信じられない顔でそういった。なぜそんな呆れた目で俺を見るのか、一体俺が何をしたんだと怒りが湧いてくる。しかし、目の前のゴミ廃人には俺は逆立ちしても勝てないので、ひとまず後で親しいヤツにこのゴミ廃人の暗殺を頼んでおこうと心に決め、俺は怒りを収めた。

「いやいや…だってお前。嫌ってるくせに、アイツ等がなんかトラブったら積極的に絡んでいくじゃねえか」

呆れた調子でゴミ廃人は続ける。

「そりゃあお前、アイツ等がなんかやらかしたら、なんか俺に文句がくんだよ。おたくの人達でしょなんとかしてくれって…。じゃあ俺の名誉守るために早々に対処しなくちゃいけないよなってなるだろ」

ゴツゴツとお代わりのビールを飲み干しながら愚痴った。他のヤツ等は俺をアイツ等の保護者か何かだと思ってる節がある。生産職は特に多い。大概俺が呼ばれるときは、精神干渉系のヤツが露店で詐欺だとか難癖つけてるときだとかだった。

「まあなんだ…。アイツ等がああやってできるのは俺の異能があるからだ。ちったあ責任感じてんだよ。っーか若干後悔してるしな。『解放』したこと」

「お前の異能便利すぎるからな。汎用性というか、このゲームをプレイするうえで必須級のモンだろ。精神干渉系のヤツ等からしたら特に」

「痛覚軽減や五感操作とかにも使えるからなあ…。いろいろ出来過ぎるせいで単体じゃあ自分にしか効果ねえけど」

俺の異能『精神転換』は精神に干渉する異能の中で、トップクラスの汎用性を持つと自負している。コイツは自身が感じている感情や精神状態を別の精神状態に変えることが出来るという能力だ。このゲームはリアルだ。痛覚や五感で知覚するものは現実と何ら変わらない。だから人間は痛みを感じすぎるとショック死するし、臭いがキツ過ぎると気絶する。俺の異能はそういったものを別の精神状態に変更できるのだ。痛みを感じてもそれを熱さに変えたり、あるいは楽しいといった感情に変えることが出来る。恐怖を怒りに変えることだって可能だ。だからこそリアル過ぎて、ダメージを受けすぎるとショック死するこのゲームで初期異能として選ばれたのだ。

「まあ『解放』は取引のせいだから今更…。って感じだけだよお…」

俺はうなだれた。いまさら悔いたってどうしようもないことだったからだ。それでも俺は陰鬱とした気分から立ち直れなかった。いつだって後悔する。やらないで後悔するよりやって後悔した方がいいというが、それは違う。後悔なんてしないほうが一番なのだ。でも人間は不便な生き物で、選ばれなかったルート分岐に思いを馳せて後悔する。そちらの方がグッドエンドにたどり着いたのではないかと。

「まあまあ…。んで、俺を呼んだ用ってなんだよ。自爆屋死体遺棄事件だけか？それなら俺はレベル上げにいくぞ」

若干頭がフワついてきたと『解放』の話でダルい感じになってるが、まだ正常な思考が出来そうな感じなので、ツマミの焼き鳥を食みつつそのまま本題に入った。

「レベル上げを手伝ってほしいんだ」

「ええっ……？」

感触が悪いので、ネギマのネギをかじりながら改めて言った。なんかネギマってネギだけとか鶏肉の部分だけ食べたくなるときってあるくね？

「わからなくもない。食い方キモいと思うけど。で？レベル上げエ？んなの一人でやれよ」

どうやら声に出てたらしい。この食い方はキモいのか……と若干ショック受けつつ、レベル上げに難色を示すゴミ廃人に説得を始めた。

「自爆屋や博士だって来るんだぞ。あとなんかついてきたパパ派（精神干涉系の派閥）の知らん娘が一人。自爆屋は前衛つつーか自爆だし、博士や俺は後衛だ。知らん娘は前衛らしい。あとはお前が前衛に入ってパーティーの完成なんだよ。手伝ってくれよオ……レベル上がる前に殺しに来る奴が多くてうんざりしてんだよオ……俺は初期異能の一人だぞオ……俺をないがしろにしていると思ってるのかア……ああん………？」

初期異能として採用されたことを最大限に利用しつつダルがらみする。酔いもあってか足元がおぼつかないので、去ろうとしているゴミ廃人の足に縋りつく感じになった。涙と鼻水でコイツの全身甲冑を汚してやる。そうして眠気がエグくなってきたので、そのままスコーンとゴミ廃人に縋りついたまま眠ろうとした。すると、ゴミ廃人は俺を引きはがすために心底面倒だという声色でこう言った。

「わーった！わーったから離せ！きたねエな！」

俺はゴミ廃人から了承を得られたので、即座に立ち上がり涙と鼻水を取り去る。酔いと眠気を『精神転換』の力で、平常心へと変換し酔いと眠気を醒ますと、颯爽と居酒屋の受付に行く。財布から借りた金を取り出し会計を終えると、変わり身の早さに茫然としているゴミ廃

人に向けてこう言った。

「いつまで呆けているんだ。酒の飲み過ぎは体に毒だぞ」

背中ではキレルゴミ廃人から全力ダッシュで逃亡しつつ、俺は待ち合わせの場所へ向かった。

ゴミ廃人って…面白!!…

b e f o r e 粉状の俺、 a f t e r 宇宙人に魔改造された俺

case 2-2 待ち合わせ

俺はボコボコにされていた。腕や足はあらゆる方向に曲がり、顔は殴られ血と痣でボロボロになっている。胴体は小さい刃物で斬られたように無数の切傷が存在した。

息も絶え絶えで今にも死にそうな様相だ。しかし、生きている。HPが0になつていないからだ。

即死等の特殊な状態異常でもない限り、腕が挽けても足が挽けても、最悪頭だけになろうとも、HPが0ではなければ生きている判定になる。

回復系の異能が効力を発揮しなくなる段階、それまではずっと生き続けるのだ。

こんな惨いことを行った犯人はゴミ廃人であった。

犯行現場は噴水広場、人通りが多くよくパターリーの待ち合わせに使われる場所だ。プレイヤーが露店を開き、売買を行っている場所でもある。

白昼堂々の犯行であった。現実ならば、現行犯逮捕だ。しかし、このゲームではプレイヤー同士の争いは見逃される。それほどまでに争いが常態化していた。

ヤツは怒り冷めやらぬ様子だが、これ以上肉体が損壊すると、死亡判定を食らうので抑えているらしい。

口や喉を潰さないようにボコったヤツは辛うじて喋れる俺に謝罪を要求した。

「ナメた真似毎回するよなお前。ちったあ学習しろよな」

ゴミ廃人は胡乱な目でこちらを見ている。どうやら謝るまで治療してくれないらしい。

テキストに頭下げておだてりやいいだろうと、俺は口を開いた。

「サーセン、反省してまあっす」

俺は舌をピロピロと出しながら謝罪した。コイツに頭を下げることを心が拒否したからだ。

やっつてすぐにやっつちまったなと後悔の念が湧く。しかし、己の心に背くような真似を俺はしたくなかった。自分自身に正直でありたい。俺の信念からくるものであった。

「あ？」

ゴミ廃人はキレた。

コイツはなんだかんだ言いつつ、頼みを聞いてくれる気のいいヤツだが唯一ナメられることだけは許すことはできない。ナメた態度をとると、廃人の名にふさわしい技量と、拷問の末無理やり『継承』した異能の数々で殺しに来るのだ。

コイツは廃人だ。四六時中このゲームをプレイしている。そのため、会うたびに所持する異能が増え、戦闘能力が向上していく。そしてその異能の数々を使いこなすセンスがある。

真正正銘の化物だ。

ゴミ廃人が身体、ちょうど腹のあたりから何かを引き抜くような動作をした。その右手には赤黒いモヤがかかっている。異能だ。それも『継承』した借り物の力ではない。アイツ自身の異能…。

詳細な効果は不明。異能というのは己のパーソナリティから生じているようなものなので、それを開示するということは、言ってしまうと己の性癖を開示するのと一緒だ。だから皆黙秘する。

しかし、ゴミ廃人はこのゲームではそこそこ有名なので、異能の傾向や考察とやらが存在している。異能の断片的な特徴から性格やパーソナリティを割り出せるのだ。ヒ○カ式性格診断かよ…。異能の内容ではなく、性格や考えを割り出そうとするあたり、ネットの闇が垣間見える…

それに則るなら、コイツの異能は、身体能力向上系の亜種。身体能力向上系の異能を持つヤツは自尊心が強いヤツが多い。己の中に信念があると言えば聞こえはいいが、要は自分本位、利己的なヤツだ。

そして、なんだかんだと他者の言うことに耳を傾ける。頼みを断れない。そして割を食う。



そういった利他的の面も持ち合わせている。これは精神干渉系にありがちなタイプだ。よって、コイツは精神干渉系＋身体能力向上系の、“他者に自己を誇示するナルシスト”であり、“自分の力を誇示するために人助け等で他者に依存する”歪な精神構造を持っていると考察結果が出ている。

だから俺はコイツを適度におだててやれば言うことを聞く便利な道具扱いをしている。実際便利だ。

俺はコイツと仲がいいので、かなりプライベートな話もする。よって独自に割り出せた性格や今までの戦闘情報から、コイツの異能は『触れた者の力を吸い取って自身を強化する』モノなんじゃないかと、俺は睨んでいる。簡単に言うなら、ジャ○アンシステム。お前の力は俺のもの、ということだ。

そしてこの時、精神干渉系の特性を併せ持っているため、精神干渉を抵抗しない限り、力を持つてかれる…相手はゴミ廃人より強くなければ、強引に雑誌やおもちやを奪われるの○太君みたいに力を奪われる。

そして、普段のコイツの生活を踏まえると、映画版特有の綺麗なジャ○アンといえる。そして、キレたときやレイドの時は、利己的な部分が表面化し、アニメ版ジャ○アンになるとというのが俺の考察だ。面倒すぎる…

ヤツの右手が俺に触れた。おごご…。どんどん力が吸われていく。段々と衰弱していく俺の命をたっぷりと吸ってか、ゴミ廃人は生き生きとしていた。肌ツヤがよくなつていく。女性が羨むような肌ツヤになったゴミ廃人とは対照的に、力のすべてをゴミ廃人に吸われ、ミイラみたいにならびた状態になった。

ふと…風が吹くと、俺の身体はその風に乗って天へと昇っていくようにサラサラと粉状になった。

粉状の俺が風の悪戯かゴミ廃人の頬をふつと撫でた。ゴミ廃人は撫でられた頬に触れ、ほつり…つばやいた。

「謝るなら…言葉でいえよ」

都合よく解釈したゴミ廃人は、今までの怒りが嘘だったような感じ

でその場を去った。

そして、もはや回復系の異能が使えなくなるまでに分解された粉状の俺は死んだ。

case 2-3 待ち合わせ part 2

俺はリスポーンし、足早にリスポン地点である神殿から離れた。ここにはヤツがいる。出来るだけ周りのヤツ等と目を合せないようにし、耳を澄ました。

もし、ヤツがいるなら怪音波が出ている。その怪音波から離れるように動けばいい。幸いにも俺は自身の異能により五感を強化することが出来る。

というより、他の五感の感度を下げて、下げた分上げることが出来るだけなんだが。

俺は視覚・聴覚以外の五感の感度を最低にまで下げ、その分聴覚の感度を上げた。そうすることで、怪音波を拾えるくらいまで聴覚を強化する。

：見つけた。西南西の方向。こちらに歩いてくる。位置から推測するに、神殿内の治療室から入口に向かっていているんだろう。俺は歩く速度を上げた。ついてこられては困る。

~~~~~♪

早い：！どんどん近づいてくる。このゲームはどれだけレベルを上げようと人間の移動速度は人間の域を出ない。もし出るとするならばそれは、移動速度を上げる異能を持っているということだ。アイツ：また異能を『継承』したのか：！

俺は身震いした。気分はDODのハ○トレスに追いかけられるサイバーだった。斧投げてくる巨女な。エイムで殺しに来るキラ：アイツ苦手なんだよな。放物線で来るから視界外から飛んで来た時、マジビビりする。

俺が入口を遠回りでも移動しても、それがわかっているように移動してくる。ヤツの怪音波が今上機嫌であることを指し、それがだんだんと近づいて来ていた：。周りが俺の位置情報を流しているのだ。神殿に常駐している人間ならそういうことを平気であることを俺は実

体験から知っていた。そしてヤツは、俺を異常な価値観で慕っている。

来る…！俺は身構えた。

「%&%(☒)(%#"&"/" )%」

そこには、聖女のような恰好をした女がいた。しかし、異常な点がいくつかある。額に捻じれた角が一本生えており、両目は糸かなにかで縫われている。それなのに、足取りはふらついてるわけではなく、しつかりと歩いている。

「聖女様のありがたい御言葉です。心して聴きなさい」

そばには、お付きの者がいて、ふと周りを見やれば、一部の人間が膝について祈りの体勢をとっており、他は何かのイベントか？と物珍し気にこちらに視線を向けている。

このTRPGに出てくるSAN値が若干削れそうな女…名をユニコーンという。

「%&☒(&☒)(%&\$&)&☒

なんなんだ…？一体何を言ってるんだ？この女は異能により言語を剥奪されている。なんなら、視覚や聴覚といった五感までもを剥奪されている。

では一体どうやってここまで移動したりしてきたのか。それは額に生えた角に全てを置換しているからだ。

この女にとって、角とは、肌であり、舌であり、鼻であり、耳であり、目でもある。そういう異能を持っている異常者だ。

女が俺に近づいてくる。俺は離れようと、一步二歩下がる。ユニコーンのはつきり言ってる宇宙人だと考えている。それも、人間社会に溶け込み、支配するタイプの宇宙人だ。それほどまでに、精神が歪で、それなのに周りに聖女と慕われているという事実が俺を狂わせる。

俺はこの女を人間として見れない。わからないからだ。俺の『解放』した異能でさえ、この女が使うと別物になる。それを真似するために一緒にいた時期があった。

しかし、真似することはできなかつたし、頭のおかしさに怖くなつて俺は逃げた。やはり姿形が若干似通ってるだけの宇宙人で、その思

考を真似することはできないというのが俺の結論だった。

ガツと腕を掴まれる。腕をつかんだヤツは先ほどまで膝をつき、祈りの体勢を取っていたヤツ等だった。俺は振りほどこうと抵抗するが、レベル差なのか、異能なのか、がっちり俺を掴んで離さない。ゆつくりとユニコーンが俺に近づいてくる。近づくと頭に下げている、ちようど俺の身体に額の角が触れられる距離で、鳩尾あたりで動きを止めた。

「やめろやめろやめろやめ…！」

俺は予想される現実から必死に逃げようとしたが、それは叶わずゆつくりと、しかし確実に俺の鳩尾に角がめり込んでいく。いや刺さった。ずんずんと身体の肉や内臓をかき分け進んでいく角の嫌な感触に、とつさに『精神転換』を使って不快感や痛みを平常心へと変えていく。自分の身体を突き進む角の感触を冷静に分析しつつ、テレビの電源を切ったみたいに俺は意識を落とした。

case 2-4 精神世界

俺は目覚めた。ここはどこだ…？いや、わかっている。俺の精神の中だ。こんなことをできるヤツは一人しかいない。

〈こんにはは〉

そうユニコーンである。突然というか、いきなりの急展開というか…はつきり言って未だにユニコーンの行動についていけない。どうして角を相手に刺すと、相手の精神に入り込めるんだ？わからない…。だから関わりたくないのだ。やってることが、人間には理解できないオーバーテクノロジーを持つ宇宙人のソレである。

ここでは普通に対話が可能で、平然と話しかけてくる。俺の異能によるものらしい。どうやってたらそういう使い方できんだよ…。怖いよ…。

俺の知らない俺の異能で、平然と精神に入り込み、話しかけてきた宇宙人に俺は恐怖した。

〈聞こえますか〉

宇宙人は俺に近づいて話しかけてくる。距離が近い。いや精神の中で距離もクソもないと思うが、表現するなら耳元で言われているのと

同じ感じになった。

〈聞こえてる聞こえてる。聞こえてっから近づくんじゃねえ宇宙人〉  
〈酷いですね〜。私は貴方に感謝し、慕っているというのに〜〉

悲しいという感情を前面に出してくる宇宙人にうんざりとしながら対応する。

〈慕ってるなら毎回俺の身体に角刺してくるのやめてくれねえかなあ…〉

〈私のコミュニケーション方法だからしょうがないよ〜〉

〈物騒なコミュニケーションすぎんだよ…俺毎回この後死ぬんだよ失血死で…〉

この宇宙人の対応に俺は諦めていた。何を言っても、俺の言い分が通ったことはなかったなので、もはや話を通じない宇宙人に振り回されてると思わないと、やってられないからだ。

〈しょうがないしょうがない〜。それで〜？何処行こうとしてたの？〉

怖っ…。俺の精神の中なので、俺の感情やら考えてることがダイレクトにこの女に伝わる。

俺はこの感情ジェットコースター女に心底恐怖していた。呆れの感情はもはやなかった。やはり宇宙人…、どこに興味や地雷があるのかわからない…。しかし、俺がどこに行こうとしてるのが、この女の興味を引いたらしい。

〈あはは〜。そう怖がらなくても〜〉

宇宙人は俺が恐怖一色になったことに喜色満面なようだ。人の恐怖しているところを喜ぶ様は、やはり自分とは違う生き物なのだと伝えてくる。

〈で？何処に行こうとしてるの？〉

怖い…。怖いよ…。俺は怖がりながらも自身がレベル上げに行く途中だということを伝えた。

〈なんだ〜。そういうことなら手伝うよ〜。私回復系の異能だしね〜〉

やはりついて来ようとする。しかし、この女は自爆屋と仲が悪いの

だ。この女は回復系の異能を持っており、回復系の異能を持つ者は、他者の生存に強い執着心：というより、救わなくてはいけないという強迫観念のようなものを持つ。

それが、自爆屋の刹那的な死と致命的に合わないのだ。自爆屋にとって、自分の命は自分を彩るための道具でしかない。しかし、この宇宙人にとっては自らの命を自分勝手に投げ出す輩という認識になる。水と油だ。

俺は自爆屋もいることを伝えた。宇宙人は自爆屋を忌避している。自爆屋には虫よけになつてもらおう…。

しかし、俺の読み通りにはならなかった。

へ付いてきますよ。自爆屋さんが自爆する前に、治せばいいだけですからねえ。>

コイツ…！どうやって自爆屋に対する苦手意識を…！

やはり宇宙人は宇宙人だった。いつの間にか、自爆屋に対する苦手意識を克服してる…。

たかが苦手意識と侮るなかれ。この宇宙人と自爆屋が一緒にいると、パーティーが崩壊する。宇宙人は自身の仕事である回復を放棄し、自爆屋は宇宙人の目の前で、自爆したまらない。お荷物が二人増えるのだ。

しかし、俺はこの宇宙人を連れてきたくなかった。この宇宙人にとって、俺は特別らしいからだ。特別扱いされてるんだからいいじゃないと思うのは軽率だ。会話のために、角を鳩尾に刺してくる女を好きになれる要素がどこにある？その後に死ぬんだぜ？

しかも、謎の好待遇から宇宙人まわりの信者に憎悪されているのだ。ただ、宇宙人の意向にそぐわないことだけはしないので、憎悪だけが溜まっていく。そして、宇宙人がいない時に発散される。

俺のレベルが上がらない原因の一つだ。だから俺は関わりたくない。しかし、宇宙人からしたら、可愛い信者がそんなことをするはずがないと言うので、もうどうにもならない。俺は諦めた。

へもう…いいじゃないですかあ。付いていくのがそんなにダメなんですかあ？>

宇宙人がなおも近づきごねてくる。

へやめろやめろやめろ！混ざる！精神混ざっちゃうから！

うごご…、俺は自分の中に自分とは違う何か混ざってくる不快感に吐きそうになった。なんだこれは…？自分が自分ではなくなっていく感じがする…。わた俺ha：コイトに付いていきたい。daつて、このひとが、やめろ：gaつが：救ttてくれたかra…意識が…。

俺は精神が混ざるという世にも恐ろしい体験をしたため、精神が耐えられなくなり、意識が暗転した。どうやら死んでしまったらしい。

目が覚めると、ベットに寝かされてるらしく、宇宙人が俺の右手を握っていた。そうして、口元だけ、ニツコリと微笑みながら

「%&#(めzame sitaか?)」

意味不明な言語と合わせて副音声がかえってきた。副音声はノイズが走っていたが、徐々に鮮明になっていく。

「!#\$!#%&#&(%&\$%#”&()%&\$#”(貴方と精神が混ざった影響か意思疎通ができるようになりました)」

そう：か…。俺は自分が宇宙人に魔改造されたことを知り、そつと目を瞑った。俺…宇宙人の実験体にされたよ…。

こうなってしまった原因であるゴミ廃人を呪いながら、俺は疲弊しきつた精神を休めるために眠りについた。もう…どうにでもなってくれ…。

case2エンド

約束は普通にブツチしたため、パーティーメンバーからお叱りとりんちを食らったが、宇宙人に魔改造されたことを知ると、慰め会が始まり、また今度レベル上げに行こうという話になった。優しさに俺は泣いた。